砦の中に小宇宙をつくって“ビールで夕涼み”の開放感を楽しむ

ガーデナー建築家・勝田無一さんが提案する「囲いの建築」は、
建物の外壁を塀にしたり、敷地全体を大胆に囲って
外からの視線を遮断して家と庭をつなげるという考え方。
囲いの建築での快適な庭ライフを紹介しながら
光の取り込み方、階上庭園のつくり方などを教えていただきます。

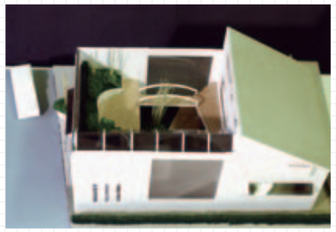
勝田 無一（かつた・むいち）
建築家・造園家
1951年 静岡県出身。
1974年 東洋大学工学部建築学科卒業。
1983年（有）創設計設立、代表。
住宅・マンション・施設店舗の設計から、造園・ガーデンデザインの設計まで、「庭と家作り」をテーマに活動。
著書「私の設計顛末記」創設計、「人気ガーデナーのガーデンデザイン」 世界文化社、住宅雑誌等掲載多数。

庭の緑や風を楽しみたくて、大きな窓のついた開放的な家を建てたのに、道路からまる見えで落ち着かず、結局窓にはいつもカーテンがかかったまま、庭で過ごすこともなく……そんな残念な住まい方をしている方は決して少なくありません。
そこで私が考案したのが「囲いの建築」でした。中途半端なフェンスでなく、半透明なポリカーボネートなどで、2階までの高さのある塀をつくり、敷地全体をぐるりと囲ってしまう。あるいは建物の外壁自体を塀にして、テラスなどの外部空間ごと包み込んでしまう。とくに土地が狭くプライバシーも保ちにくい都会で快適に住まうためには、砦を築き、内と外を一体化させた小宇宙をつくる必要があるのではないでしょうか。
こうして設計した「囲いの建築」の中では、みなさん本当にリラックスして暮らしています。たとえば風呂あがりに裸で中庭テラスに出て、ビールを傾けながら夕涼みだってできます。外からの視線を遮断したうえで、家と庭をつなげれば、周囲に気をつかわずに戸外の開放感を味わうことができるのです。

PLAN 1

ガラスブロックで光を入れて視線・騒音を遮る都会のリゾート K様邸

前後左右が立て込んだ住宅街。横がだめなら上に庭をつくろう、ということで、階上にルーフガーデンを設置。建物はシンプルな箱形にして、壁自体が塀の代わりになるように設計しました。壁面の一部にはガラスブロックを組み込んだので、光を入れながらも視線は遮り、壁で囲むことで騒音もかなり防いでくれます。
2階の斜め屋根の下にリビングダイニングをつくり、庭に向かって大きな窓を取ったので、隣家を気にせず窓を開け放ち、光や風を感じて暮らせます。



付近の建物の高さを調査して囲いの壁の高さを決めたので、のぞかれる心配もなし。

リビングダイニングから庭に向けて大窓を設けた開放的な間取り。三角トップライトのバスルームからタオル一枚で夕涼みも。

シンプルな外観のアーバンコートハウス。ガラスブロックの内側には、都会のリゾートが隠れています。

PLAN 2

高さ4mの明るい塀で敷地を囲い庭と室内を開放的につなぐ T様邸

光を透過する半透明のパネルで、敷地のまわりに塀を巡らせたダイナミックなプラン。塀は2階までの高さがあるので、道路や隣家からの視線が遮られ、落ち着いてくつろげる明るい庭がつくれますし、家の窓を大きく開けて室内と庭をつなげることができます。
塀は上に抜けているので、建ペイ率も関係なく自由に設置できます。空の青さを手中にするプライベート・ガーデンは、都市型住宅の「外」を楽しく棲みこなすライフスタイルの提案です。

高さ4mのポリカーボネートの塀を巡らして敷地を囲ったので、明るさはそのままに、まわりの視線を気にせずにくつろげるプライベートガーデンが完成。

土間空間の一角に設けられたインナーガーデン。坪庭として和室から眺めるのも風情があります。

室内→土間空間→庭という3段階の空間が、ゆるやかにつながっています。どこにいても外を感じられる開放感が心地よい。

家の外観。明るい半透明の塀なので、高さがあっても圧迫感や閉鎖感はありません。

土間と庭は大開口で一体化。塀が外からの視線を遮っているので、これだけ開いていても落ち着けるのがうれしい。

そこが知りたい！

Q 塀の素材は？風はどう抜けるの？

A 素材は、ここではポリカーボネートを使いましたが、FRPも使います。ポリカーボネートは高級感があるんですが高価なので、少しお値段の安いFRPを採用することが多いですね。また、防火規制のある地域では、プロフィリット・ガラスを使います。
4mもの塀が立っていると風通しが悪そうですが、ある程度敷地が広ければ、風は自然に抜けます。狭小地の場合は、風を抜くために、パネルとパネルの間を少しずつ開けて張るといった工夫をします。